

環びわ湖

大学地域交流フェスタ 2025



活動報告会プログラム

11月30日(日)

9:30～12:30<予定>

会場:オンライン(ZOOM)で実施

主 催 :一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム
〒520-0056 大津市末広町1-1 日本生命大津ビル4階
TEL : 077-526-8850 FAX : 077-526-8851
e-mail : info@kanbiwa.jp <http://www.kanbiwa.jp/>

ごあいさつ

環びわ湖大学・地域コンソーシアムは、その事業の中で、大学地域連携課題解決支援事業として、コンソーシアムに加盟する自治体における地域の課題解決に向けた、地域住民と大学等のゼミ等と連携した教育研究、地域活動等の取組を支援しています。滋賀県内に立地する大学の持つ多様な知的資源の地域への還元を促進とともに、県内 14 大学等に通学する約 3 万 5 千人の学生が、地域課題の解決に貢献し、それを通して、滋賀の人々や生活文化、風景、產品などの魅力に出会い、交流を深めることで、滋賀に愛着を持っていただくことを目指し活動支援を行っています。

その中でも大学地域交流フェスタは、環びわ湖大学・地域コンソーシアムが、大学と地域との交流を深めることを目的として、コンソーシアムの「大学地域連携課題解決支援事業」活動報告を行い、大学と地域が手を携えて互いの発展に力を注ぐ一つの大きな糧とするものです。

世界中に様々な影響を与えた新型コロナウイルス感染症により、フェスタの開催方法も対面からオンラインでの開催に変更を余儀なくされた一方で、オンラインでの開催であれば、様々な方に気軽に参加いただけることもあり、今年度もオンラインで各活動の中間報告を行うことといたしました。

工夫を凝らして活動ができたところはその内容と今後の予定を、また活動ができないかった場合には今後の予定や実施に向けての検討結果や計画を紹介していただきまます。この試みによって、互いの工夫や計画を参考に、それぞれの活動を一步でも前に進めることができれば、と願っています。国連が提唱している S D G s に積極的に取り組み、このコンソーシアムを拠点として滋賀の地から国内はもとより世界に向けて、活動内容を発信していきたいと考えています。

滋賀の豊かな地域づくりにとって、本コンソーシアムは重要な役割を担っていきます。この活動報告が意義深い催しとなることを祈ります。

2025（令和7）年11月30日

一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム

理事長 井 手 慎 司（滋賀県立大学理事長）

■プログラム（概要）

1. 開会（09:30）

2. 環びわ湖大学・地域コンソーシアム 地域課題解決支援事業活動
中間報告会（09:30～12:30）

3. 閉会（12:30<予定>）

環びわ湖大学・地域コンソーシアム
大学地域連携課題解決支援事業 活動報告

| | | |
|-----|---|----|
| 1. | 草津市×滋賀大学 | 4 |
| | ビワイチ「歩育」のススメ～幼稚園で、親子で楽しもう～ | |
| 2. | 東近江市×龍谷大学 | 6 |
| | 過疎化地域での地域活性化の活動 | |
| 3. | 大津市×びわこ学院大学 | 8 |
| | 大学生に3つの授業実践力をつけるための子ども向け科学実験・ものづくり教室の取り組み | |
| 4. | 滋賀県×びわこ学院大学 | 10 |
| | いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪～ | |
| 5. | 東近江市×びわこ学院大学 | 12 |
| | スポーツ拠点を中心とした地域防災～みんなで考える地域の避難所運営～ | |
| 6. | 東近江市×びわこ学院大学 | 14 |
| | 一ひきこもり、育児ノイローゼから人々を救う—音楽セラピーとレクリエーションによる子育て支援事業「0歳から楽しめる親子ふれあい音楽教室」 | |
| 7. | 滋賀県×成安造形大学 | 16 |
| | 滋賀県CO2ネットゼロ社会づくりの推進をテーマにした児童向けワークショップデザインプロジェクト | |
| 8. | 大津市×成安造形大学 | 18 |
| | こども園児との日用品を応用した造形あそびワークショップ | |
| 9. | 東近江市×びわこ学院大学 | 20 |
| | 「東近江市 小学校体育元気アップ事業 | |
| 10. | 長浜市×長浜バイオ大学 | 22 |
| | 余呉の森の価値を生むエコシステム～持続的に学ぶことが可能な森の好循環～ | |
| 11. | 彦根市×滋賀県立大学 | 24 |
| | 象サイがまた来た Re 象サイ来る～ごみから資源へ 彦根発！循環型社会への挑戦～ | |
| 12. | 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学 | 26 |
| | びわこいきいきプロジェクト～フレイル予防と社会的つながりを目指して～ | |
| 13. | 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学 | 28 |
| | 親子で楽しむリズムトレーニング～子ども達の運動能力向上を目指して～ | |
| 14. | 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学 | 30 |
| | いきいき生活プロジェクト～笑顔でのばす健康寿命～ | |
| 15. | 東近江市×びわこ学院大学 | 32 |
| | 学校部活動の地域展開に向けての仕組みづくり～学校・地域・年代が繋がるスポーツ活動の場～ | |

| | |
|---|----|
| 16. 滋賀県×滋賀医科大学 | 34 |
| 高校生をはじめとする一般市民への出張型心肺蘇生(BLS)講習 | |
| 17. 大津市×滋賀医科大学 | 36 |
| 膳所・平野地域の思春期世代の子供たちがトラウマインフォームドな大人たちと 関われる、落ち着ける第三の場所づくり「あかり」 | |
| 18. 大津市×滋賀医科大学 | 38 |
| じぶんごと Café | |

No. 1

| | |
|----------------------------|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| ビワイチ「歩育」のススメ～幼稚園で、親子で楽しもう～ | |
| [SDGs 目標番号：3, 4] | |
| 提案者 : 滋賀大学教育学部幼児教育コース奥田ゼミ | |
| 自治体担当者 : 草津市子ども未来部・幼児課(谷口) | |
| 連携大学担当者 : 滋賀大学教育学部 教授(奥田) | |
| 発表者 : 竹中穂乃花 松永凜 | |

1. 取組体制

この取組の主体は、滋賀大学教育学部幼児教育コースの奥田研究室ゼミ学部生5名であり、この学部生がビワイチ歩育マップを作製する。次に、市内幼稚園等でビワイチ歩育マップを活用していただく実践を行う。

2. 背景・目的

近年、活発に体を動かす遊びや外で遊ぶ時間が減り、幼児の運動量低下や多様な動きの獲得の遅れが指摘されている。幼児期において、体を動かすことは、体力や運動能力の基礎を培う上で重要な事柄である。また、丈夫な体づくりや意欲的な態度形成などさまざまな分野においても体を動かすことは大切であるといえる。そこで、今回この取組では、草津市の遊び場や公共施設などを取り上げ、親子で歩き、体を動かす指標となる「歩育マップ」とそれに付随するガイドブックを作製する。この地図とガイドブックを活用し、幼稚園外の時間でも歩いたり体を動かしたりすることを促す。

3. 活動内容

歩いたり、体を動かしたり、親子で楽しむことができる草津市内のスポットを取り上げ、それを草津市の地図に掲載する。そこへ訪れたり、幼稚園外の時間で体を動かしたりしたときの歩数を記録し、協力していただく園内の幼児の歩数を合計し、ビワイチを達成できるようにする。また、そのマップに基づいた持ち運び可能なガイドブックを作製する。ガイドブックには、スポットごとに幼児と訪れる際に知りたい情報や実際の様子、体を動かす遊びの例などを掲載する。作製後は、草津市内の幼稚園に協力をお願いし、万歩計をもとに歩数を個人や園内で記録し、歩数や運動量の増加、体を動かすことへの意欲促進を図る。

4. 成果と課題、今後の取組

マップを作製するにあたり、草津駅から徒歩圏内の de 愛ひろば、渋川周辺や草津宿本陣周辺の街道を実際に歩き、トイレの有無や周辺の商業施設、飲食店などを観察した。これらは、マップやガイドブックに掲載するため、その様子を写真に撮った。ガイドブックに関しては、写真やトイレ、駐車場についての情報のほかにQRコードを記載するなどして作製した。ビワイチマップについても一日に一枚シールを貼りますを進めることができるように作成することで調査期間である2か月でゴールにたどり着けるようにした。また、一日の歩数と活動の内容を記録できる歩数記録表も作成。これらを草津市内の3つのこども園で5歳児の各家庭に向けて一枚ずつ

配布を行った。10月1日から万歩計を着用していただき計測が開始されている。現在は計測から一か月がたち、10月分の記録表を回収しデータを計測している最中である。

課題としては、協力いただいているこども園の先生方や保護者の方から、万歩計の反応についてや幼児がリセットボタンを押してしまうなどの意見が寄せられているため、カバー付きの万歩計に変更することや万歩計の付ける位置を工夫するなどの改善案を検討している。

今後の取り組みでは課題となっている万歩計の改善案を実施し、12月の計測をよりよいものとしデータの計測と分析を行う。また、改めて地図とガイドブックを活用し、幼稚園外の時間でも歩いたり体を動かしたりすることを促すことができたか、改善点も含めて考える。

Park

1

ひ 彩ひろば

「草津川跡地公園ひ彩ひろば」は、旧草津川の跡地を活かした約1.2kmの自然散策コースも整備されているので、のんびり過ごすことも◎
季節ごとに自然が變じて、川遊びやキャンプ、アスレチック遊具、ホール遊びなど、思いっきり体を動かせるスポットです！
バーベキュー・やカフェ、いちご狩りができるストロベリーファクトリーもあって、大人も子どもも一日中ワクワクできます。

◎おすすめポイント

- ・清潔なトイレや広々とした駐車場が広さを持つ公園。
- ・屋根付きベンチやテラス付きのお店もあり、子どもの遊び様子を見守りながらゆったり休憩できる。
- ・自転車と歩行者の通路が分かれています。

◎注意ポイント

- ・トイレが少し古いので、おむつ替えスペースは設けていません。

INFORMATION

滋賀県草津市追分7丁目11-2
10



No. 2

| | |
|--|---------------|
| プロジェクト名（活動テーマ）：過疎化地域での地域活性化の活動 〔SDGs 目標番号：目標 11、目標 15、目標 17 〕 | |
| 提案者 | ：龍谷地方創生プロジェクト |
| 自治体担当者 | ：松井 正人 |
| 連携大学担当者 | ：牛尾 洋也 |
| 発表者 | ：椎木 啓仁 |

1. 取組体制

私たちは、行政機関や地域団体と協力して地域振興に取り組んでいる。また、行政と地域機関の連携が希薄である場合に、私たちの団体が積極的に介入することによって、連携を強化し地域活性化の役割を担うこともある。さらに、私たち自身が関係人口の一部となり、地域のコミュニティに参加することで地域活性化が期待できる。地域のターゲットとなる世代を絞ることなく、全世代に等しく、地域参画ができるような取り組みを行っている。なお、私たちの組織は、2年前にサークル化し、現在も運営している。後輩たちに円滑に引き継ぎ、持続的に地域とのかかわりを持とうとしている。また、組織としては、俗人化することなく、全員が地域と密接に関われるような体制を築き、長い期間を見据えて成果をあげることを目指している。

【主な連携先】

- ・東近江市環境部 森と水政策課
- ・東近江市企画部 政策推進課
- ・東近江市商工観光部 商工労政課
- ・近畿農政局 都市農村交流課
- ・八日市商工会議所青年部
- ・滋賀学園高等学校
- ・木地師のふるさと高松会
- ・高野自治会
- ・雪野山の森・里山クラブ など多数

2. 背景・目的

東近江市をはじめとする滋賀県では少子高齢化や人口減少、過疎化が課題である。私たちはフットパスという手段を用いて、地域での活動をとおして、地域の魅力を地元の人々に再発見してもらうだけでなく、地域外の人々へも知ってもらい、地元のファンになってもらうことで、関係人口の増加を図ることとした。地元を盛り上げたいと考える地域の方々が自発的に地域整備を行う手助けをし、持続的な街の構築、関係人口の増加を主眼としている。また、フットパスのブランド化や将来的な担い手となる若年層への働き掛けも目標としてい

る。

3. 活動内容

主な活動は、フットパスイベントの開催やコースの作成である。他にも、地域イベントの参加や手伝いなども行っている。また、問題解決や研究のため、ヒアリング調査の実施や、現地調査、フットパス先進国の熊本での研修も行い、フットパスや地方創生について深めている。

【開催イベント一覧】

- 5月 18日 東近江市永源寺高野町、太郎坊（阿賀神社） フットパス開催
- 8月 11日 東近江市 ほろ酔いフットパス開催
- 11月 29日 東近江市 君ヶ畠町 フットパス開催
- 12月 12日 滋賀学園高校 キャリアイベント 開催予定
- 12月 14日 東近江市永源寺高野町 フットパス開催予定
- 12月 20日 東近江市 マチカフェフットパス開催予定

4. 成果と課題、今後の取組

東近江市を中心としてイベントを何度も開催し、魅力発信をすることができている。フットパスと飲み歩きを掛け合わせ、3度目の開催となったほろ酔いフットパスでは参加者が40名を超え、地元のお店や名所の紹介を歩きながらすることができた。また、地元の新聞やテレビでも取り上げられ、地域活性化に貢献することができた。

春のフットパスイベントでは、年々参加者が増加しており、今回開催する高野と君ヶ畠では、高野は大河ドラマ「光る君へ」でも紹介された「紫染め」の実演を、君ヶ畠は、木地師たちの伝統工芸品を作ることができる体験の実施をと、各地域で有名な自然体験を行うことができるようになり、地元の食材とフットパスを楽しむだけでなく、実際に参加者が積極的に取り組むことができる体験を組み込めたことは、大きな成果であったと感じる。

しかしながら、改善してきたとはいえ、集客の不十分さや、街歩きイベントのインパクトの少なさ、地元の方々の認知の低さや若年層の参加率の低さが課題としてあげられる。

今後は、12月に滋賀学園高校での講義とワークショップ、高校生を対象としたマチカフェフットパスを開催する。滋賀学園高校との連携では、共に郷土である東近江市や、自分のキャリアについて発表やワークショップを行う予定であり、将来的担い手である若者への郷土教育の一環であったり、大学生と絡むこと進路学習の一助となることを目指す。マチカフェフットパスこれまでのフットパスやほろ酔いフットパスの要素は入れつつ、高校生向けの店を巡りつつ、ざっくばらんに話すことを予定している。全てのイベントやイベント外でも地域活動の参加を続けながら、地域活性化に貢献できるように邁進する。

No. 3

| | |
|--|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| 大学生に3つの授業実践力をつけるための子ども向け科学実験・ものづくり教室の取り組み | |
| 〔SDGs 目標番号： 目標4、目標5 〕 | |
| 提案者 : 組織・団体名：びわこ学院大学 代表者の役職・氏名：教授 箱家勝規 | |
| 住所 : 東近江市布施町29番地 | |
| 自治体担当者 : 自治体・所属：大津市科学館 役職・氏名：指導主事 久我真平 | |
| 連携大学担当者 : 大学・所属：びわこ学院大学・経営戦略地域連携研究支援課 役職・氏名：課長 岡崎孝文 | |
| 発表者 : びわこ学院大学4回生 澤井美咲 | |

1. 取組体制

びわこ学院大学箱家ゼミの3回生、4回生の学生8名を中心に「科学館プロジェクトチーム」を立ち上げ、学生主体となった事業の推進を図ってきた。活動内容については、すべて大学主体で実施している。大津市科学館の指導主事と連絡協議を緊密に行い、スケジュール調整、成果、課題を明らかにしてきた。

大学内では、学生と指導者で活動の意義を話し合い、内容の検討、教材の選択、事前準備、リハーサル、本番、振り返りなどを綿密に行なってきた。

2. 背景・目的

小学生の高学年から中学生までの理科離れは依然深刻である。小学校教員をめざす大学生は、実験技能だけでなく、授業実践力の不足が大きな課題である。小学校の教員になんでも理科の授業は専科任せの実態があり、理科を指導せずに中堅教員になることもあり得る。

そのため、大津市科学館でのイベントを通して、幼児から中学生を対象とした科学実験やものづくりを通して、科学の面白さ、不思議さ、楽しさを体感させるとともに、大学生の授業実践力を高めることが目的である。

3. 活動内容

大津市科学館と本大学とは7年半にわたり、「わくわくサイエンス」「サイエンス屋台村」「大津少年少女発明クラブ」で連携してきた。5年前からは「スーパーわくわくサイ

エンス」「びわ学大科学教室」の事業で、学生が講師やサポーターとして継続的に取り組んできた。これまで、昨年度から引き続き、のべ 40 回以上の取組を通して、大学生の授業実践力（①教材分析力、②子ども実態把握力、③授業展開力）を高めていく取り組みを進めてきた。

4. 成果と課題、今後の取組

本テーマでは今年度が 2 年目にあたる。4 月から 3 月まで、毎月約 1 回「わくわくサイエンス」の講師として、科学館で科学実験やものづくり活動を実施してきた。今年度も 11 月までで 7 回実施してきた。これまで年間 300 名の子どもとその保護者を対象としてきた。また、5 月から 12 月まで、年間 8 回開催される「少年少女発明クラブ」のサポーターとして、指導補助を行った。

7 月には、科学館事業で 400 名規模の参加がある「サイエンス屋台村」のブースを担当した。8 月には、3 日間、科学館の展示ホール内に「びわ学大科学教室」のブースを設け、子どもが満足できるような科学ものづくり、遊びに取り組み、3 日間で 400 名近くの親子と活動してきた。9 月、2 月には、小学生 36 名を対象に「スーパーわくわくサイエンス」を開催し、講師やサポーターとして活動してきた。

学生にとっては、様々な児童との関わり、興味を引く科学実験、夢中になると予想できる「ものづくり」について、学生同士で事前に話し合い、これらを限られた時間内で授業として進めていく授業実践力が培われてきている。

子どもやその保護者の前で科学実験を演示したり、「ものづくり」を体験したりしてもらうためには、その教材、素材についての深い知識理解とそれら扱う技能が欠かせない。その意図やそこから何が学べるのか、また、その素材を子どもたちは使いこなせるのか、どのように提示すれば面白いと思ってもらえるのかなどを学生が主体となって取り組んできた。



No. 4

| | |
|--|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）：いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪～ 〔SDGs 目標番号：目標 3、目標 4、目標 16〕 | |
| 提案者・組織・団体名：びわこ学院大学 BGU 若鮎隊 | |
| 代表者の氏名：びわこ学院大学 3回生 リーダー 山崎 朱莉 | |
| 住所：東近江市布施町 29 | |
| 責任者 役職・氏名：教授 内藤 紀代子 | |
| 自治体担当者：自治体・所属：滋賀県 総合企画部 県民活動生活課 役職・氏名：主事 森 大毅 | |
| 連携大学担当者：大学・所属：びわこ学院大学 地域連携研究支援課 役職・氏名：課長 岡崎 孝文 | |
| 発表者：びわこ学院大学 4回生 仲 愛依 | |

1. 取組体制

本事業の具体的な取り組みは下記の 4 点である。

- ①園や教育機関、イベントで、いのちの安全教育を行うため大学生が大学教員や専門員、滋賀県警察や滋賀県担当者から教育や指導を受ける。
- ②教育や指導を受けた大学生が現場で教育ができるようトレーニングを受ける。
- ③大学生が園や教育機関、イベントでいのちの安全教育を実施する。
- ④実施の評価を行い教育活動の今後の継続方法を検討する。



図 1 「いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪～」取り組み体制」

2. 背景・目的

令和6年の滋賀県警察本部生活安全部の報告によると、性犯罪に関する対象事案は373件（令和5年288件）、子どもと女性に対する前兆事案は565件（令和5年562件）と報告され、昨年と比較しても減少傾向にあるとは言えない。社会として性暴力・性犯罪防止の強化が図られる中、依然として性暴力・性犯罪が見られる。

そのため、今年度もびわこ学院大学BGU若鮎隊の大学生が「いのちの安全教育」を園や教育機関、イベントで実施し性犯罪・性暴力の予防を図ることを目的とし活動の継続を行う。

3. 活動内容

昨年度は、①大学生がいのちの安全教育を行うための基礎的な教育・指導を、おうみ犯罪被害者支援センター（OVSC）の専門員から受け、②出前講義の場で現地教員や大学教員から助言を得ながら実践トレーニングを行い、大学生の実践力向上を図った。

今年度は、③依頼のあった2つの園（50名）と7つの教育機関（中学生383名・高校生1,346名）において、大学生がいのちの安全教育を実施した。さらに、イベント「すまいるあくしょん」では安全教育カルタを行い（子ども67名・保護者56名）、大学祭では啓発ポスターを展示し（子ども101名・保護者233名）と広く啓発を行った。④実施後にはミーティングを行い、大学教員の助言のもと教育内容の評価とプラッシュアップを実施した。

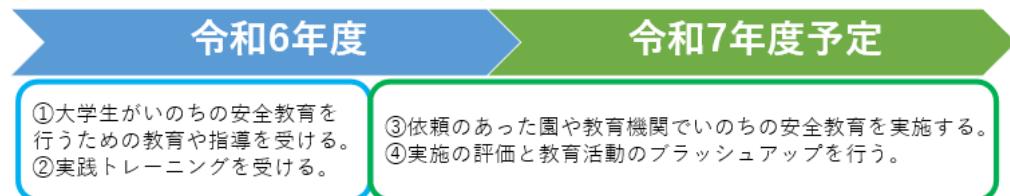


図2 「いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪～」の実施スケジュール



図3 イベントでの教育・啓発の様子(すまいるあくしょん・大学祭)

4. 成果と課題、今後の取組

成果として、この2年間で「いのちの安全教育」を通じ、子ども3,119名と保護者329名に性犯罪・性暴力防止の啓発を行い、大学生自身の安全意識の向上にもつながった。

課題としては、社会の急速な変化により新たな犯罪や課題が予測されることから、時代のニーズに即した教育内容の更新が求められる。今後も滋賀県担当者、大学教員、おうみ犯罪被害者支援センター専門員、滋賀県警察サイバー犯罪対策課と連携し、教育内容のプラッシュアップと啓発の継続が重要である。

No. 5

| | |
|-----------------------------------|-------------------------|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| スポーツ拠点を中心とした地域防災～みんなで考える地域の避難所運営～ | |
| 〔SDGs 目標番号：目標3、目標7、目標11〕 | |
| 提案者 | ：びわこ学院大学 学長 沖田 行司 |
| 自治体担当者 | ：東近江氏文化スポーツ部スポーツ課 北川 史也 |
| 連携大学担当者 | ：びわこ学院大学 スポーツ教育学科 高木 俊 |
| 発表者 | ：満島 章穂 |

1. 取組体制

本プロジェクトは、びわこ学院大学スポーツ教育学科の合同ゼミナールを基盤とし、大学・総合型地域スポーツクラブ・行政が連携して地域防災力向上を図る実践教育として位置付けていく。今年度は、昨年度の取り組みを踏まえ、地域住民を主要対象とした「1部制」イベントへ変更し、より多様な総合型クラブでも実施可能な汎用性の高い防災プログラムの構築を目指している。

【体制】

指導教員 高木（スポーツ教育学科長）/祐末（地域スポーツ・マネジメント担当）
大学側役割 全体運営・プログラム企画：祐末ゼミ（スポーツマネジメント等）
専門プログラム企画：高木ゼミ（スポーツ生理学 等）
クラブ側役割 能登川スポーツクラブ：企画受け入れ、会場調整、役員会での実施決議
行政側役割 スポーツ振興課：大学・クラブ間調整、広報物の相談
※場合により防災危機管理課：プログラム監修・助言（昨年度実績あり）

【流れ（現時点）】

- ✓ 大学指導教員間で昨年度の振り返り・今年度方針の確認
- ✓ 大学-行政-クラブでの打ち合わせ（実施決議・日程調整）
- ✓ 各ゼミへの趣旨説明とプログラム再設計
- ✓ クラブ役員会での実施承認と概要説明 ← 現在ここ

2. 背景・目的

東近江市には7つ(+1)の総合型地域スポーツクラブが存在し、スポーツを通じた交流や互酬性の醸成、地域課題の共有など、地域コミュニティの核となる役割を担っている。

また、総合型クラブが活動拠点とする体育館・スポーツ施設は、災害発生時には地域住民の避難所として機能する場所である。

能登半島地震など過去の大規模災害では、地域クラブや住民による初動避難所運営の事例が多く報告されている。昨年度の取り組みでは、クラブ関係者向けの防災プログラムを中心に実施したが、本年度は地域住民への対象拡大を図り、総合型クラブ自らが実施可能な“汎用型防災イベントモデル”の構築を目的とする。

さらに、今年度は会場・対象クラブともに国体開催に関連する制約から、当初予定より大幅なスケジュール変更が必要となった。この経験を踏まえ、さまざまな規模のクラブでも実施しやすい柔軟なプログラム設計を目指す。

3. 活動内容

■ 実施概要（決定事項）

日 時：2026年1月10日 午前
会 場：東近江市 能登川アリーナ
対象クラブ：能登川スポーツクラブ
協 力：東近江市スポーツ振興課

■ プログラム内容（今年度版案）

今年度は1部構成（午前）の地域住民向け防災体験イベントとし、前年度午後プログラムの拡大版として設計する。

| 時間 | プログラム名 | 対象 | 内容(案) |
|--------|----------------|---------------|---|
| 午前(3h) | 地域防災ワークシヨップ(仮) | 地域住民・親子・クラブ会員 | 生活に直結する「避難所体験」「簡易サバイバル飯」「家庭の備えチェック」など、誰でも参加しやすい体験型プログラム |
| 同時進行 | 簡易サバイバル飯づくり | 地域住民・親子 | アイラップやカートンドック等、家庭でも実践できる調理法の体験 |
| 同時進行 | 避難所体験(居住空間) | 地域住民 | 実際の避難スペースの体験、限られた空間の工夫紹介 |
| 同時進行 | 普段着ができる健康新体操 | 地域住民 | スペース不要で高齢者でも可能な運動紹介 |

4. 成果と課題、今後の取組

【現状】 大学：各プログラム担当者が昨年度資料を基に内容を再検討・簡素化

クラブ：役員会にて実施決定、趣旨の理解と協力体制の確認

行政：広報方法の検討、大学との連絡調整

【今後のスケジュール】

大学 プログラム間の内容調整/広報物（チラシ・SNS素材）の作成と確定

クラブ 会場使用の最終確定（配置・動線等）/当日スタッフ（クラブ会員）確認

行政 東近江市内小学校への広報配布/市HP・広報誌での周知

【本年度の成果物（予定）】

総合型クラブが単独開催できる「防災イベントマニュアル」

地域住民向け防災イベント企画書（テンプレート）

※ 今年度は、昨年度の枠組みを継承しつつ、「地域住民への対象拡大」と「持続可能なクラブ自主実施モデルの構築」を重点化している。

No. 6

| |
|---|
| プロジェクト名（活動テーマ）： |
| —ひきこもりや孤独死、育児ノイローゼから人々を救う—音楽セラピーとリクリエーションによる子育て支援 |
| 〔SDGs 目標番号： 目標 3 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。 目標 4 すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。〕 |
| 提案者 : びわこ学院大学短期大学部児童学コース 竹下ゼミ |
| 自治体担当者 : 東近江市企画部及び東近江市地域振興事業団 上山哲夫 |
| 連携大学担当者 : びわこ学院大学短期大学部児童学コース 講師 竹下則子 |
| 発表者 : 中尾梨菜 |

1. 取組体制

① 東近江市企画部及び東近江市地域振興事業団

公益財団法人東近江市地域振興事業団は、東近江市(教育委員会)からの委託を受け、年間約100の生涯学習講座を実施している。そのうちの一つが「親子で楽しむ0歳からの音楽会」事業であり、びわこ学院大学短期大学部児童学コース・竹下ゼミと連携して実施している。

② びわこ学院大学短期大学部児童学コース竹下ゼミ

びわこ学院大学短期大学部児童学コースの竹下ゼミは上記事業団より地域連携講座として依頼を受け、この活動に参加している。

2. 背景・目的

人口減少や超高齢化を受けて、ひきこもりや孤独死、育児ノイローゼが問題視されている。これらを防止することを活動目的とし、びわこ学院大学短期大学部、同学生が生涯学習講座（公財東近江市地域振興事業団主催）で学ぶ人々と交流することを通して、人々の地域活動への参加、生きがいづくり、活力ある地域コミュニティの形成、まちづくりに資する。

3. 活動内容

びわこ学院大学短期大学部がと公益財団法人東近江市地域振興事業団と連携して実施している生涯教育の取り組み「親子で楽しむ0歳からの音楽教室」の事業は、東近江市立「あかねホール」を会場に、ゲストによる音楽演奏、ピアノ伴奏による合唱、子どもの楽器体験、音楽リクエーション、リトミックなどを通じて、地域住民の心身の健康に貢献している。

① 『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』

日 時：2025年5月24日(土) 開 演：15:00～15:45

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)

ゲスト：SIESTA(ユーフォニウム&サックス)

★プログラム

1 手遊び 2 絵本読み 3 ユーフォニウム&サックス演奏 4 楽器遊び

② 『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』

日 時：2024年7月27日(日) 開 演：15:00～15:45

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

ゲスト：マリンバ奏者 井塞鈴菜

★プログラム

- 1 ふうせんのうた 2 絵本読み(大型絵本) 3 マリンバ演奏
- 4 シフォンスカーフ遊び 5 マリンバ演奏 6 楽器体験

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』

日 時：2024年9月27日(土) 開演：15:00～15:45

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

ゲスト：わたむきリコーダー隊「リコピン」

★プログラム

- 1 手遊び 2 絵本読み(大型絵本) 3 リコーダー演奏 4 シフォンスカーフ遊び
- 5 リコーダー演奏 6 楽器体験

◎『0歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』

日 時：2024年11月15日(土) 開演：15:00～15:45

ゲスト：RiUH(ヴァイオリン, ヴォーカル, ピアノ)

会 場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)

監 修：ピアノ弾き歌い奏者 竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)

★プログラム

- 1 ピアノ演奏 2 絵本読み(大型絵本) 3 歌っておどろう
- 4 手話で歌おう 5 楽器体験 6 ソプラノ独唱 7 じゃんけん遊びをしよう
- 8 ヴァイオリン独奏 9 楽器体験

4. 成果と課題、今後の取組

◎成果

① この活動を通して、子どもを持つ保護者の子育ての不安を緩和し、音楽コンサートを通して親同士の相互交流、子育ての相談や情報提供などの援助が行える場を提供している。また子どもたちは、ゲストの演奏する様々な音楽を聴いたり、様々な楽器を直接手に取って演奏したりすることで、集中力や思考力などの力が身につくとともに、「感じたことを表現する」機会を持つことができていると推察される。演奏者や保護者、子どもが音楽を通して直接ふれあい、双方向性も大切にすることで、保護者の子育て不安の解消や親子のコミュニケーションづくり、子どもが成長する上での貴重な経験となっている。

② 大学生においてはリーダーシップの育成、地域住民との関りによるコミュニケーション能力の育成、保護者への相談、支援や援助を行うための保育者としての資質能力の育成、音楽的技術能力の向上などが育まれている。

◎課題 ①チラシ配布などの宣伝や周知について課題がある。

② 対象年齢が0歳児～6歳児までの幅広い年齢層を対象としているため、プログラムの構成が難しい。

◎今後の取り組み

2026年1月に「親子で楽しむ0歳からの音楽会」を開催予定である。

ゲストは「saxorhythm」(ソプラノ、テナー、アルト、バリトンのサックス奏者)である。

子どもたちがサックスの演奏に合わせて管楽器の楽器体験をする予定である。

No. 7

| | |
|--|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| 滋賀県 CO2 ネットゼロ社会づくりの推進をテーマにした児童向けワークショップデザインプロジェクト 滋賀県×成安造形大学 | |
| 〔SDGs 目標番号： 目標 11、目標 12、目標 17 〕 | |
| 提案者 | ：成安造形大学 総合領域 非常勤講師 小野真紀子 |
| 自治体担当者 | ：滋賀県・総合企画部 CO ₂ ネットゼロ推進課 主任主事・坂口知沙 |
| 連携大学担当者 | ：成安造形大学 未来社会デザイン共創機構講師 田口真太郎 |
| 発表者 | ：成安造形大学 総合領域 小野真紀子 |

1. 取組体制

成安造形大学 総合領域 3年生：ワークショッププログラムの開発と実施を担当。
滋賀県地球温暖化防止活動推進センター（淡海環境保全財団）、滋賀県 CO₂ ネットゼロ推進課：
内容監修とサポートを提供。
大津市内の小学校：実施場所を提供し、児童の参加を促進。

2. 背景・目的

本助成金事業は、美大の授業で制作した児童向け環境学習教材と体験プログラムを、授業内に留めず、実社会で活用できる形へ発展させることを目的としている。これにより、成果物が教育現場で実際に活用されることを目指している。

3. 活動内容

①プロトタイプの改善と実践

学童でのワークショップを実証実験として実施し、教材やプログラムのテストを行い、改善を重ねようとしている。

②ワークショップ教材集の作成

複数の成果物をまとめた「ワークショップ教材集」を作成し、当事者以外の教育者でも活用できる形で市内の学童に寄贈する予定。

4. 成果と課題、今後の取組

①ワークショップの改善

昨年のワークショップ1「南極防衛隊」とワークショップ2「ワットランプ」に続き、今年はワークショップ3「ぶんべつぽいぱい」をブラッシュアップ。

前提 :

前期授業期間内の 2025 年 7 月 23 日に、仰木の里東小学校学童クラブ（大津市）の児童を対象にワークショップの実践を行った。1-6 年生 15 名が参加した。

内容 :

- ・ワークショップ内容は右図のとおり
- ・分別について、こどもたちに新たな情報を伝えることができたと考える
- ・カードやコインなどのグッズがこどもたちにかわいいと好評だった
- ・2025/11/8 に日本デザイン学会学生プロポジションで発表、多数の貴重な意見を頂いた



課題 :

- ・児童より「おうちの人へ話したいのだけれど内容を忘れそう」などのコメントがあった
- ・ツール（カードやコイン）が多く、片付けがしづらい構成であった
- ・学会でも「参加者が振り返りができるツールが不足している」との指摘があった。



今後の方針 :

- ・振り返りができるツールのデザイン
- ・おかたづけができる工夫



②ワークショップの手順等をまとめる紙面デザインの検討

成果 :

2025 年度までに学生がデザインしたワークショップが 10 デザイン構築された。これを紙面デザインに落とし込む作業を完了している。

課題 :

現時点では特になし

今後の方針 :

ご協力いただいた滋賀県、淡海環境保全財団、その他団体・企業より、この取り組みについてのコメントを依頼している。そのコメントを追加し、書面類を完成させ、2024 年度の取り組みに続き、ファイルにまとめて、大津市こども未来部児童クラブ課のご協力を得て学童等に配布したい。

No. 8

| |
|-----------------------------|
| プロジェクト名（活動テーマ）： |
| こども園児との日用品を応用した造形あそびワークショップ |
| [SDGs 目標番号：4] |
| 提案者 : 成安造形大学 藤井俊治 |
| 自治体担当者 : 本福寺こども園 |
| 連携大学担当者 : 成安造形大学 田口真太郎 |
| 発表者 : 藤井俊治 |

1. 取組体制

- 成安造形大学（実施主体）：学生スタッフ（8名）の招集、ワークショップの計画、実施、指導・監督を担当。学生は園児と直接交流し、造形遊びの指導とサポートを行う。
- 本福寺こども園（サポート）：プロジェクトの主要な対象として、年長園児100名が参加。第二本福寺こども園でのワークショップ会場の提供。
-

2. 背景・目的

本研究は、大津市の子ども・子育て支援施策に基づき、大津市堅田地域にある本福寺こども園における造形活動の不足を補うことを目的としています。令和7年度は、9月2日（火）に本福寺こども園本園の年長100名を対象に、本学の学生とともに紙コップを用いた造形遊びを実施。園児の心身の健全な発達を支援し、協調性と創造性を育むことを目指しました。また、本学の学生が園児と関わる過程で、多様な気づきを得ることも期待されます。

3. 活動内容

活動は三段階に分けて構成。第一段階では、園児が紙コップに親しむためのアイスブレイク的な活動をグループで行いました。第二段階では、グループごとに協力して紙コップタワーを制作し、より高く積み上げることに挑戦しました。第三段階では、参加者全員で紙コップを重ね合わせ、床いっぱいに大きな円形の作品を制作しました。最後には、振り返りを行い、園児たちは自分の感想をグループ内で共有しました。

4. 成果と課題、今後の取組

ワークショップ実施後のアンケートによる成果の達成状況をまとめた。

＜園児にとって＞

協働と挑戦の場

紙コップを積み上げる遊びを通じて、友達と協力しながら「どうすれば高くできるか」「壊れないようにするにはどうするか」を考え、失敗と成功を繰り返すことで、悔しさや達成感を体験し、協調性や粘り強さを育んでいた。

自由な発想の広がり

「楽器にしたい」「迷路を作りたい」など、遊びを発展させるアイデアが園児から自然に出てきており、創造性や主体性を高める活動になった。

感情と自己表現の場

感想を共有することで、自分の体験を言葉にして人と分かち合う力が育まれた。

<学生にとって>

教育的視点の獲得

園児と直接関わることで、指示や声かけの難しさ、子どもに合った表現や態度を学んだ。保育者の実践を観察することで、教育現場での具体的な方法を体感的に理解する場になった。

自己成長と創造的刺激

園児の豊かな発想や工夫から刺激を受け、自分自身の制作活動にも新たな視点を取り入れられるきっかけになった。

<こども園教員にとって>

子どもの新しい姿の発見

普段の保育では見られない園児の表情や行動を目にすることで、子どもの成長や可能性を再確認する機会となった。

自らの学びと成長の場

大学生や園児と一緒に活動に参加する中で、自分自身も遊びの楽しさや教育的な気づきを得ており、「大人も真剣になれる場」として機能していた。

5. 課題、懸案事項

□活動後の振り返り・鑑賞時間の充実

園児が自分の体験を深めるだけでなく、学生・教員にとっても教育的な学びの整理につながるため、感想を共有する時間をより丁寧に設ける必要がある。また、夏場は開催時期の検討も必要。

□グループ間の達成度の差への対応

「全員が目標の高さを達成できる」ことをめざし、今年度は事前の作戦会議を導入したが、園児の主体性を尊重しながらも、達成感を共有できる進行方法のさらなる工夫が求められる。

□新しい造形内容の導入・多様化

積み上げだけではなく、園児の意見を取り入れた「ちんあなご制作」などを導入したが、創造性をさらに広げるためには、紙コップを用いた音や動き、ゲーム性のある活動など、新しいプログラムの開発が課題である。

□家庭や地域への活動波及

R6 年度に作成したガイドブックの配布により家庭での共有は進んだが、活動を一過性で終わらせ、家庭・地域での継続的な遊びや学びへつなげる仕組みづくりが今後の課題である。

□学生の教育的視点の深化

学生は「子どもへの指示の難しさ」「保育者の声かけの工夫」などを学んだが、子どもの発想を教育的な意義としてどう捉え、大学での制作や研究にどう還元するかという視点はまだ十分に育っていない。振り返りの際にこれから的学生自身の学びを言語化するサポートが必要である。

No. 9

| |
|----------------------------------|
| プロジェクト名（活動テーマ）：東近江市 小学校体育元気アップ事業 |
| [SDGs 目標番号：目標 3、目標 4] |
| 提案者 : びわこ学院大学学長 沖田 行司 |
| 自治体担当者 : 東近江市教育委員会教育研究所所長 栗田 一路 |
| 連携大学担当者 : 深田 直宏 |
| 発表者 : 池田虹子 大本さやか |

1. 取組体制

- ①東近江市教育研究所：本事業の広報及び連絡調整。
- ②びわこ学院大学：深田ゼミの学生を中心とする子ども学科の学生。小学校の体育活動に対する学生ボランティアの取り組み及び大学教員による体育活動に対する情報提供。

2. 背景・目的

小学校の先生は幅広い業務を抱えており、多忙な中で体育授業の計画準備を進めるのは容易ではない。加えて体育授業が苦手な先生の存在も指摘されている（中央教育審議会, 2002）。そこで学生ボランティアによる体育活動に関する支援及び大学教員による体育授業に関する情報提供を行い、学校現場の負担軽減及び学生の実践的能力の育成を図ることを目的とする。

3. 活動内容

本事業は、東近江市教育委員会（教育研究所）と連携し、市内小学校体育授業の充実・改善、及び体育的活動に関する支援を行っていく。具体的支援内容は以下の通りである。

- ①体育授業の充実・改善に関わる支援及び情報提供
- ②体育授業に関わる校内研修の設定
- ③体育的活動の充実・改善に関わる支援及び情報提供
- ④水泳授業の支援（学生ボランティアの派遣）
- ⑤運動会、マラソン大会等の支援（学生ボランティアの派遣）
- ⑥実技講習会の設定

4. 成果と課題、今後の取組

令和7年4月から現在までの取り組み状況は以下の通りである。

- ① 令和7年10月 東近江市M小学校：運動会の補助
- ② 令和7年10月 東近江市M小学校：校内陸上記録会の補助（写真1, 2, 3）
- ③ 令和7年11月 東近江市M小学校：マラソン試走及びマラソン大会の補助（全3回）
- ④ 令和7年11月 東近江市N小学校：学生による体育ゲストティーチャー1回目（写真4, 5, 6）
- ⑤ 令和7年11月 東近江市N小学校：学生による体育ゲストティーチャー2回目（写真7, 8, 9）

②東近江市M小学校：校内陸上記録会の補助の様子】



写真1 校内陸上記録会補助の
参加学生

写真2 ゴールで記録測定する学生

写真3 小学生とリレー勝負

【東近江市N小学校：学生による体育ゲストティーチャー1回目の様子】



写真4 子どもに自己紹介する学生

写真5 マット遊びの様子

写真6 手作りペットボトルけん玉の
お手本を示す学生

【東近江市N小学校：学生による体育ゲストティーチャー2回目の様子】



写真7 活動説明する学生

写真8 子どもと一緒に
マット遊び

写真9 剣の持ち方を教える学生

活動を通して、学校行事のボランティアでは小学校の先生方の負担軽減に少し役立てたと感じている。子どもの指導に関わるゲストティーチャーとしての活動では、準備の大切さ、子どもに対する簡潔な説明や話の大切さを実感することができた。また、何より子どもたちの楽しそうな笑顔が一番の励みとなった。課題としては、教員採用試験の3年時受験が可能となつたため、授業の課題と採用試験の勉強に取り組む中での活動となり、時間の調整が難しいことであった。そのため採用試験前の春学期の取り組みをセーブしなければならなかつた。今後は見通しを持ち学生が役割を分担するなどして大学の授業との両立を図っていくことが大切である。

No. 10

プロジェクト名（活動テーマ）：余呉の森の価値を生むエコシステム
～持続的に学ぶことが可能な森の好循環～

[SDGs 目標番号：目標4、目標11、目標15]

提案者：奈良篤樹

自治体担当者：上坂謙太

連携大学担当者：大同一誠

発表者：秋山創太朗

1. 取組体制

長浜バイオ大学・オルガネラ構造機能研究室：活動の統括と運営の全てを担当。

余呉小中学校：6年生が試料散策と電子顕微鏡観察（大学にて実施）、読み札作成（小中学校にて実施）の取組に参画。

自治体：ながはま森林マッチングセンターや長浜市地域おこし協力隊との協力で、余呉の森林散策ルート作成や提案する森林課題の設定をする。

2. 背景・目的

人口減少の問題を抱える余呉は、琵琶湖へと注ぐ川を生む森を有しており、生態系保全の鍵となる。本取組では、小学生が探索した森の資源を走査型電子顕微鏡で撮影する。得られた写真を見て俳句を詠んだり、電子顕微鏡仮想空間に入ったりすることで、全く新しい森の魅力や価値を小学生が体験するシステムを構築する。

3. 活動内容

SDGs Aichi EXPOへの出展・参加による、電子顕微鏡と俳句の実践の発信(10/5-8 実施、愛知県常滑市)

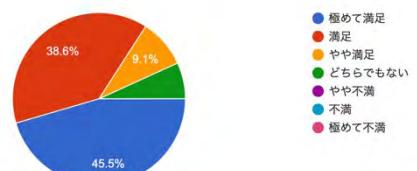
[活動内容] これまでしてきた電子顕微鏡と俳句の、余呉小中学校の6年生との取り組みを内外に発信することを目的に、SDGs Aichi EXPOへの出展・参加を行った。出展内容の満足度は非常に高く、アンケート回答者のアンケート回答者の93.2%が本出展ブース内容に満足していた。本年度は、森で小学生と行っているSDGsの取り組み等を漫画で伝える展示を新たに試みており、興味を持ってくれた回答も全体の25%を占めた。

余呉の自然を利用した電子顕微鏡観察と俳句の作成

[活動内容] 余呉小中学校の6年生を対象に、本学設置の走査型電子顕微鏡(日立 S-3400N)の操作体験を行った。



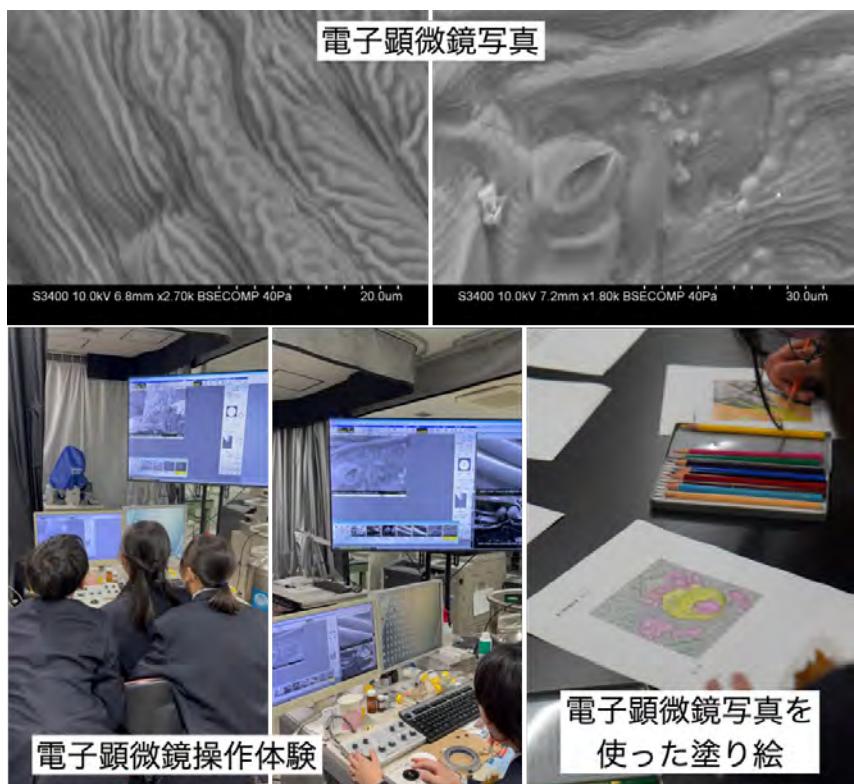
本ブースの満足度を教えてください（一つだけチェックして！）
44件の回答



(試料のサンプリング[11/10 実施]) 森林について理解を深めるために、余呉小中学校内で生徒と歩いて落ちているものを拾い、電子顕微鏡観察サンプルとした。当初、小中学校の裏山で散策を行う予定であったが、天候不順であったことと、熊の出没の可能性もあり、市と協議し変更した。長浜地域おこし協力隊との連携で、様々な森のものをサンプリングでき、学びが多かったと考える。



(電子顕微鏡観察[11/18 実施]) 走査型電子顕微鏡を生徒自身が操作をし、写真を得ることができた。生徒には事前学習として電子顕微鏡にまつわる基礎知識となるプリントを配布し、電子顕微鏡がどのような機器であるのかを学ぶ機会を与えた。電子顕微鏡写真は白黒なので、得られた電子顕微鏡写真に色をつける体験もすることで、自由なイメージを育むことを目指した。



4. 成果と課題、今後の取組

本取り組みはまだ途上であり、今後、11月下旬に俳句の作成をし、1月下旬に取り組みの総まとめをし、SDGsについて考えてもらう授業を余呉小中学校で行う予定である。

No. 11

プロジェクト名（活動テーマ）：サイがまた来た Re 来る
～ごみから資源へ 彦根発！循環型社会への挑戦～
[SDGs 目標番号：11, 12, 15]

提案者 : 彦根市

自治体担当者 : 巍佐文衛、宮腰峻輔

連携大学担当者 : 滋賀県立大学 生活デザイン学科 准教授 山田 歩

発表者 : 彦根市清掃センター 巍佐 文衛

1. 取組体制

- ・彦根市 清掃センター
 - ・滋賀県立大学生活デザイン学科
- 行政が活動の中核となり、大学(学生、教員)と共同して取り組みを企画・運営し、学生が主体となって、啓発活動や情報発信を実施。

2. 背景・目的

彦根市におけるごみのリサイクル率は年々低下しており、令和4年度で12.6%となっており、その改善に向けた連携を図りたい。

3. 活動内容

<現地視察>

どのようなごみが分別されず排出されているのか、また、市民に意識変化や行動変容を促すのにどのような啓発や介入が効果的なのかを検討するため、滋賀県立大学学生 5 名および担当教員が彦根市のごみ処理場の視察を行った（2025年6月24日）。

<アンケート調査>

学生のごみ分別に関する意識と行動の実態を把握するため、滋賀県立大学の学生 194 名（そのうち彦根市在住学生は 112 名）を対象に、アンケート調査を実施した（2025年7月15日）。

<意見交流会>

上記アンケート調査の結果を自治体と大学で共有した（2025年11月11日）。これらのデータについて行動経済学的な観点から課題の整理をおこなうとともに、解決すべき課題の優先順位について議論を交わした。また、学生による具体的な啓発案や介入案の提案が行われた。今後、どのようななかたちでゴミ分別に関する啓発と介入を進めるのか検討が行われた。

4. 成果と課題、今後の取組

<アンケート調査>

学生を対象としたアンケート調査からは、「分別を心がけている」と自ら回答する学生であっても、容器包装プラスチックやペットボトルを行政が指定するかたちで分別できていないことが確認された（図1）。本人は正しく分別しているつもりであるが、誤った知識に基づいて分別を行ってしまっていることが示唆された（知識の欠如）。また、正しく分別されなかつたごみが行政によってどのように処理されているのかについても十分な理解がされていないことが確認された（図2）。こうした理解不足が、分別ルールを順守しようとい

う個々人の責任感を希薄化させてしまっている可能性が浮かび上がった（モチベーション・感情の欠如）。



図1 アンケート結果例：誤った分別知識
<今後の取組みにむけて>

アンケート調査の分析を踏まえ、「知識欠如」と「モチベーション・感情の欠如」のそれぞれにアプローチする啓発・介入方法を検討している。行動経済学の知見からは、単純に正しい知識を提供するなどして「理性」に訴えるよりも、「感情」に訴えるコミュニケーションが行動変容に有効であることが知られている。効果的に「人を動かす」働きかけを体系化したナッジ理論の一つである「EAST フレームワーク」にのっとって、啓発および介入に効果が見込めるポスターおよびチラシ案を検討している（図3）。



図3 ポスター・チラシ案



図2 アンケート結果例：不正確な理解

現在、大学はこれらのポスター・チラシ案のブラッシュアップをはかるとともに、啓発や介入の効果を検証する実証実験の具体的な条件設定や手順を検討しているところである。また、行政は、実証実験に協力してくれる集合住宅を選定するとともに、「組成調査」など、これら啓発・介入の効果を検証するための投入可能な資源を調整しているところである。

これらの準備をふまえ、2026年2月ごろを目標に、社会実験を実施し、その成果を3月に明らかにする予定である。

No. 12

| | |
|------------------------------------|---|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| びわこいきいきプロジェクト～フレイル予防と社会的つながりを目指して～ | |
| [SDGs 目標番号： | 3 すべての人に 健康と福祉を] |
| 提案者 | ：びわこリハビリテーション専門職大学 作業療法学科 助教 木岡和実 |
| 自治体担当者 | ：東近江市福祉部長寿福祉課 参事 脇 美早子 |
| 連携大学担当者 | ：びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター センター長 代理 岩崎 康司 |
| 発表者 | ：中関 星彩空・平田 奈央・堀 真結乃（作業療法学生） |

1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学作業療法学科の教員および学生、東近江市長寿福祉課と共同で行う。

【びわこリハビリテーション専門職大学の役割】

- ・住民の生活評価と課題解決に向けた取り組み
- ・作業療法学生（1～3年生）及び教員によるミニレクチャーや作業活動の企画運営
- ・活動の広報

【東近江市長寿福祉課の役割】

- ・地域課題に関する情報提供
- ・住民の生活評価への直接的関与
- ・課題解決に向けた助言と実践

2. 背景・目的

東近江市の高齢化率は、2025年時点でおよそ約27.7%となっており、人口の3.7人に1人が65歳以上という状況である。さらに本学が位置する愛東地区を含む農村・中山間地域では、町別・集落別で高齢化率が30%を超えるところが多く、その進行も早いとされている。このような地区では産業の衰退や交通事情の不便さなども相まって、主体的に活動的な生活を送る高齢者の減少が避けられない現状があり、高齢者の社会的フレイルは、孤独や閉じこもりを誘発し、心身の機能低下を招くという悪循環に陥る。

本事業では、大学で行う作業活動の場を通じての場とし、地域のネットワークの再構築や孤立の防止を目指すとともに、参加者の生活の質の向上を目的とした取り組みを行う。

3. 活動内容 ※2年事業の1年目

【活動実施日】①8/30 ②9/27 ③11/29 予定：④12/20 ⑤2/28 ⑥3/28

各開催の前後には学生を中心とした企画会議や反省会、またアンケートや評価 結果の分析・検討などを開催。

【活動場所】びわこリハビリテーション専門職大学

【対象】令和6年度「高齢者健診」・「地域サロン等」で用いた質問票から健康や生活になんらかの不安があるとされた方の中から、応募のあった18名

【内容】本企画は参加者同士が地域の中で顔の知れた関係として過ごせることや、作業活動による成果物を共有し、達成感や満足感を感じ日常生活に繁華させること、大学を通いの場として学生との交流を図りつつ、認知症予防や機能維持・社会参加に取り組むことを目的としている。各開催日には、学生による認知症予防のレクリエーションと、革細工・タイルモザイクなどの作業活動を実施している。参加者は意欲的な方が多く、2回目以降には次回の開催日を楽しみにしながら日々を過ごしているとのお声をいただいている。その他、実施日ごとに感想を伺っている中には、「友達に会えてうれしかった」「頭も身体も動かせて良かった」「大好きな作業で気分が高まりました」などの感想をいただき、参加者にとって有意義の時間が提供できていると考える。



4. 成果と課題、今後の取組

作業療法の視点で地域貢献活動を目指す本学の取り組みでは2年の活動を通して、高齢者の社会的フレイルの改善・心身機能の維持・地域における交流機会の増加・社会参加の促進・地域で顔の見える関係づくりを行うことによる見守り機能の強化など、様々な成果が期待できる取り組みであると考えている。次年度では、今年度の活動終了後に本事業における課題を整理し、作業活動の成果を地域のお祭りなどで披露し、また可能であればその場に参加者とともに参加することで、あらたな人の繋がりや生活満足度の向上に努めていきたいと考える。

| | |
|--|-----------------------------------|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | 親子で楽しむリズムトレーニング～子ども達の運動能力向上を目指して～ |
| [SDGs 目標番号： | 3] |
| 提案者： | |
| 組織・団体名：びわこリハビリテーション専門職大学リハビリテーション学部 理学療法学科 | |
| 代表者の役職・氏名：教授 宇於崎孝、講師 野口真一、准教授 大西 均、 准教授 安田 孝志、准教授 藤谷 亮 | |
| 住所：東近江市北坂町 967 | |
| 自治体担当者：東近江市文化スポーツ部スポーツ課 主事 北川 史也、主事 佐々木星貴 | |
| 連携大学担当者：大学・所属：びわこリハビリテーション専門職大学事務センター 役職・氏名：センター長代理 岩崎 康司 | |
| 発表者：理学療法学科 4年 松田純 | |

1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

- ・運動能力測定、リズムトレーニング指導：理学療法学科教員及び学生
- ・教室の広報および運営、保護者への連絡：事務センター職員

東近江市スポーツ課の役割

- ・教室への助言および指導
- ・教室の運営と安全管理指導
- ・広報

2. 背景・目的

令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果、滋賀県の小学生男女とも全国平均より低い結果を示しており、運動能力が低下している。また、「体育の学習が楽しい」「運動が好き」の割合も、小学生では全国よりも低い結果となっている。

本事業では、子ども達が最新のポップな音楽に合わせて、楽しくジャンプするリズムトレーニング教室を開き、健康な発育を促すことと、親子で楽しく健康を考える機会を作ることを目的とする。

3. 活動内容

令和7年度

9月7日（日）リズムトレーニングの説明と効果についての講義、運動能力測定、リズムトレーニングの基礎的ステップ指導

10月5日（日）リズムトレーニングの基礎的ステップの復習、基礎的ステップ2の指導

11月2日（日）リズムトレーニングの基礎的ステップ2の復習、基礎的ステップ3と応用ステップの指導



(リズムトレーニング教室の様子)

9月の運動能力測定には、「握力」、「10m走」、「垂直飛び」、「反応速度」、「反復横跳び」の5項目の測定を行った。測定は、教員と学生が5項目ともに一緒に計測を行った。

リズムトレーニングの指導の前後にはウォーミングアップとクーリングダウンも行い、すべて学生が全員で指導を行った。

10月、11月はリズムトレーニングの基礎から応用までを反復して練習を行った。それぞれの回が終了したのちに、その回で指導したステップを撮影した動画を参加者の方に送り、次の回まで自宅で練習を行ってもらうように指示している。

4. 成果と課題、今後の取組

参加対象は東近江市内に在住する小学生として募集したが、応募定員30名に対して20名の応募にとどまった。実際の参加者は、第1回が子ども20名（保護者20名）、第2回が子ども8名（保護者8名）、第3回が子ども12名（保護者10名）であった。第1回に比べると参加者が減少したが、これは運動会など学校行事と重なったことが要因と考えられる。

今まで全4回の教室のうち3回が終了している。第4回（12月14日〔日〕）には、第1回と同様の運動能力測定を行い、約3ヶ月間の取り組みによる変化を観察したいと考えている。これまでの3回の教室では、子どもたちから「毎日練習している」「楽しい」「習い事にしたい」といった前向きな声が聞かれる一方で、「難しくてできない」「疲れた」といった声もあった。参加者は低学年が多くたため、難易度の設定や疲労を考慮した時間配分を検討する必要がある。

次回の第4回では、3ヶ月間の取り組みの効果を運動能力検査で確認する予定である。また、これまでしてきたすべての運動をまとめた動画を動画サイトにアップし、常に復習できる環境を整える計画である。

一方、課題として、復習動画の閲覧回数が28回、18回、8回と回を追うごとに減少しており、十分に復習が行われていないことがうかがえる。今後は、できる限り自宅でも取り組んでもらえるよう、復習動画だけでなく、動画を見ながら練習できる教材を作成し、より楽しく継続しやすい環境づくりを進める予定である。

No. 14

| | |
|--------------------------|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| いきいき生活プロジェクト—笑顔でのばす健康寿命— | |
| [SDGs 目標番号：3] | |
| 提案者 | : びわこリハビリテーション専門職大学リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授 池谷 雅江 |
| 自治体担当者 | : 東近江市健康医療部健康推進課 保健センター 係長 中野 由美子 |
| 連携大学担当者 | : びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター 事務センター長代理 岩崎 康司 |
| 発表者 | : 理学療法学科 3年 小関 麟（こぜき りん） |

1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

- ・学生、教員による評価（体力評価など）、介入（生活指導など）
- ・職員による広報、運営

東近江市健康推進課の役割

- ・講座の講師、助言指導
- ・受講対象者へ個別保健指導（血圧管理、健診受診勧奨）

東近江市シルバー人材センター

- ・受講対象者案内

2. 背景・目的

東近江市の人口は緩やかに減少しているが、逆に65歳以上の高齢者人口は増加し、2025年には高齢化率が28%になると推計されている。そして、高齢者の独り暮らし世帯は、2015年には3,339世帯であったが、2020年には3,760世帯に増加している。独居の高齢者は自宅に閉じこもりやすく、その結果身体機能や認知機能が低下し、フレイルの状態になりやすいと考えられている。近年、筋の量を表すフレイルだけでなく、筋の質の評価が高齢者の転倒予防につながる可能性が報告されている。

フレイル予防、筋質の改善のみならず、睡眠や栄養状態も重要な健康の指標である。そこで、昨年までの体力測定に加えて筋質や睡眠、栄養状態の測定を行い、「びわこいきいき体操」の指導を行うことで、活動性のさらなる向上を目指す。

3. 活動内容

第1回 6/28 体力測定、睡眠・栄養・活動アンケート1回目

第2回 7/26 体力測定結果報告、ミニ講座「介護予防と運動」、「びわこいきいき体操」実施

第3回 9/27 アンケート結果返し、講義「介護予防と生活習慣」、「びわこいきいき体操」実施

第4回 11/1 体力測定、「びわこいきいき体操」実施

以下は今年度の今後の予定

第5回 12/6 体力測定結果報告、ミニ講座、「びわこいきいき体操」実施

第6回 2/7 アンケート結果返し、ミニ講義、「びわこいきいき体操」の実施

今年度は6月より開始し、真夏の間は熱中症リスクを考慮し実施を控えた。体力測定は、6, 7月は教員と学生数名、11月は学生10名が主体となり、教員と共に実施した。ミニ講義は心身機能維持に関連するテーマで行い、参加者の意識の向上に努めた。「いきいき体操」は教員、学生、参加者が共に数を数えて声を出して行い、自宅でも継続していただけるよう促しを行った。

4. 成果と課題、今後の取組

東近江市のシルバー人材センター登録者（65歳以上）のうち、30名から40名に対し、体力評価、生活指導、体操指導を行ってきた。体力測定では、体組成計を用いた筋肉の量や質の測定、歩行速度やバランス能力、下肢筋力の測定を実施した。今回の中間発表では筋の質（位相角）に着目し、このデータが得られた22名の体力測定結果との関連を報告する。

結果：今回、バランス能力を測定する Timed Up & Go test (TUG) と2ステップ、開眼片脚立位、4スクエアステップのデータを抽出し、位相角との関係を調べた。対象者は22名（男性12名、女性10名）、平均年齢は 73.4 ± 4.45 歳であった。各測定項目の平均値と標準偏差は、位相角右半身 $5.24 \pm 0.69^\circ$ 、TUG 5.81 ± 1.21 秒、2ステップ 1.32 ± 0.11 、開眼片脚立位 50.50 ± 39.91 秒であった。

Shapiro-Wilk 検定ののち、Spearman の順位相関係数を用いて、位相角右半身と体力測定結果の相関を調べた（有意確立5%）。その結果、TUGのみ、有意に位相角右半身と負の相関 ($\rho = -0.50$) を認めた。

TUGは下肢筋力やバランス能力の評価として有用（松山2014）であり、位相角が高いほどこれら能力の高さに関連する（本間2023）。したがって、位相角の評価はバランス能力の指標となりうることが考えられた。

今後は、対象者の増加や縦断・介入研究を通じて、筋質がバランス能力および転倒リスクに与える影響をさらに明らかにする必要がある。またレジスタンストレーニングが筋質を向上するという報告があるため、今後のプロジェクトで、自宅でも可能な筋力トレーニングを推奨していく予定である。

No. 15

| | |
|---|---------|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| 学校部活動の地域展開に向けての仕組みづくり～学校・地域・年代が繋がるスポーツ活動の場～ | |
| [SDGs 目標番号：目標 1、目標 3、目標 4 |] |
| 提案者 | ：竹内 早耶香 |
| 自治体担当者 | ：北川 史也 |
| 連携大学担当者 | ：岡崎 孝文 |
| 発表者 | ：三輪 雪乃 |

1. 取組体制

- ・びわこ学院大学教育福祉学部スポーツ教育学科竹内ゼミ：企画・運営
- ・総合型地域スポーツクラブ：モデルクラブ
- ・東近江市文化スポーツ部スポーツ課：施設管理者調整・広報・プログラム完成に普及事業

2. 背景・目的

東近江市には、7つの総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）と9つの中学校がある。近年、中学校の部活動の地域連携・移行は喫緊の課題であり、東近江市も例外ではない。そこで本事業では新たな放課後時間の過ごし方、その中でもスポーツ活動の機会を提供し、部活動改革を地域・学校・大学と連携することによって、東近江市の学校部活動の地域展開のあり方を模索する。

3. 活動内容

本事業は、総合型クラブと連携し、スポーツ活動による中学生の居場所づくりとなるようなプログラムづくり構想している。総合型クラブの「中学校区単位」「住民運営」という特性を活かし、身近な場所において①中学生のニーズに応じた多様なスポーツプログラムを開発、②地域住民・大学生対象の指導者育成講習会を実施する。これらにより、中学生のスポーツ参加機会を増やし、教員負担軽減、地域スポーツ活性化の好循環創出を長期的に目指し、部活動改革と地域スポーツ振興を両立するモデルケースを検討する。

4. 成果と課題、今後の取組

現在、「活動①中学生のニーズに応じた多様なスポーツプログラムを開発」に取り組んでおり、具体的には以下のよう事業を行っている（現在、教室を2回実施）。

1) 概要

事業名：「放課後スポーツ体験教室」

期間：2025年11月中旬～11月下旬の全4回（表1）

場所：蒲生体育館、蒲生コミュニティセンターおよび朝桜中学校体育館

対象：中学生延べ7名（現在2回実施）

教室スタッフ：教員 1 名、学生スタッフ 5 名

協力機関：東近江市スポーツ課、あかね総合型地域スポーツクラブ、朝桜中学校

表 1. 教室スケジュール

| # | 実施日 | 曜日 | 時間 | 場所 |
|---|--------|----|-------------|--------------|
| 1 | 11月9日 | 日 | 13:30~15:00 | 朝桜中学校体育館 |
| 2 | 11月12日 | 水 | 15:00~16:50 | 蒲生体育館アリーナ |
| 3 | 11月21日 | 金 | 16:00~16:50 | 蒲生コミュニティセンター |
| 4 | 11月26日 | 水 | 16:00~16:50 | 蒲生体育館アリーナ |

*授業が 5 時間で終わり、部活動がない日に実施

2) 内容

各回とも、以下のよう構成で実施。

- ① 導入：簡単なアイスブレーキングやレクリエーションを通じて心身のウォーミングアップを図る。
- ② メイン活動：大きなビーチボールを使ったエクササイズやアルティメット（フライングディスクを用いたチームスポーツ）を中心に、コミュニケーションや協力を促進するようなゲーム形式のスポーツを実施（初心者でも参加しやすく、チームワークや判断力を求められるスポーツを採用した）。
- ③ クールダウンとふりかえり：クールダウンをしながら感想や学びを共有する時間を設けた（教員と大学生がファシリテーターとして関与し、前向きな対話を促した）。

※なお、本年度は 2 ~ 3 月に教室 2 クール目（全 5 回）を予定している。



アイスブレーキングの様子



メイン活動の様子

No. 16

| | |
|---|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| 高校生をはじめとする一般市民への出張型心肺蘇生（BLS）講習 | |
| 〔SDGs 目標番号：目標 3(3.4, 3.6)、目標 4(4.1, 4.3)〕 | |
| 提案者 : 救急医療研究サークル SALSA 代表 加藤幸太郎 | |
| 自治体担当者 : 滋賀県教育委員会事務局保健体育課 指導主事 水上友紀子 | |
| 連携大学担当者 : 滋賀医科大学学務課学生支援係 北川慎悟 | |
| 発表者 : 救急医療研究サークル SALSA 副代表 松本凌典 | |

1. 取組体制

滋賀医科大学救急医療研究サークル SALSA が活動の主体となる。心肺蘇生講習の受講者数が多い回等、SALSA メンバーだけではインストラクター数の不足が見込まれる場合、滋賀医科大学の学生にインストラクターの有志を募り、心肺蘇生講習を行う。

2. 背景・目的

高校の学習指導要領では心肺蘇生法が授業の一環として設定されているが、教員・資材不足で座学のみの授業や、簡易的な実技講習が行われるに留まることが多い。医学生・看護学科生がマンパワーを活かし出張型での BLS 講習を行うことで、いざ「心肺停止の患者」と遭遇した際の適切な対応を高密度・高品質で身につけることができる。また、一般市民が BLS を習得する代表的な機会は高校の保健教育と運転免許の取得時のみ等であり、習得機会が少ないため、限られた習得機会において高密度の実習講習を行うことには意義があると考える。

3. 活動内容

依頼された高校や地域のスポーツチームへ本学の医学生、看護学科生が出張して心肺蘇生講習を行う。講習は、SALSA オリジナルの講習を実施している。特徴としては、①受講者 4 人に對して 1~2 人の医学生がインストラクターとしてつき、②各グループ毎に 1 セットの胸骨圧迫用人形と AED を用いることであり、高密度・高品質の BLS 講習を行っている。また、③「救急車が来るまでの 9 分間」を模倣した独自シナリオを用いて、受講者の技術獲得を可能な限り効率的に実現する。令和 6 年度は実際に滋賀県立東大津高校の 1 年生 360 名に対して本オリジナル講習で心肺蘇生講習を行ったが、先方の評判は好評であった。そのため今年度からも同様の企画を各高校・団体に対して実施することとした。

4. 成果と課題、今後の取組

（【】：実施済み、実施確定 《》：未実施）

【高校生向け学習塾の夏季勉強合宿】

京都と奈良に教室を構える高校生向けの学習塾（大坪 OCS 様）の夏季勉強合宿が開催され、その合宿内で心肺蘇生講習を行う時間を設けていただき、京都・奈良・名古屋の高校生及び教員約

30名程度に講習を実施した。

【本学オープンキャンパスでの救急医療体験コーナー】

8/20～22に本学で開催された滋賀医大オープンキャンパスにおいて、救急医療体験コーナーを設け、来場者に心肺蘇生体験を行った。基本的には全員に胸骨圧迫とAEDの体験をしていただき、総勢約90名となった。

【八日市高校】

12/19に八日市高校の野球部(現在協議中。運動部員向け講習となる可能性あり。)対象に心肺蘇生講習を実施する。

《東大津高校》

昨年同様、東大津高校での実施を予定して先方と年度当初から打ち合わせを行ったが、高校近隣の施設で国スポの大会が行われることになり、講習時間の確保が難しいとの回答があった。現在、高校側に対象者を1年生から運動部員や希望者向けとして心肺蘇生講習を実施できないか打診中。

《立命館守山高校》

体育の授業内で心肺蘇生講習を実施する件について先方と打ち合わせを行なっていたが、カリキュラムの調整がつかず本年度中の実施は断念。一方、現在は運動部員向け講習等対象者を限定した講習の実施を打診中。

《長浜北高校》

本年夏頃に保健委員向けのBLS講習を行うことを予定していたが、国スポ等関連行事及び学校行事により講習時間が取ることが難しい旨の連絡をいただいた。来年度の再実施については以前先方より話があったが、特に進展はない。

《石山高校》

昨年度の東大津高校でのBLS講習会の実施を全面的にサポートしてくださった養護教諭の先生が本年度は石山高校へ異動となつたため、その異動先である石山高校でのBLS講習が実施できなか現在打診中。

【本学端艇部(ボート部)】

毎年ボート部からの依頼によりBLS講習を行っている。本年度は2026年2月に実施予定である。総勢約50名に講習を行う。

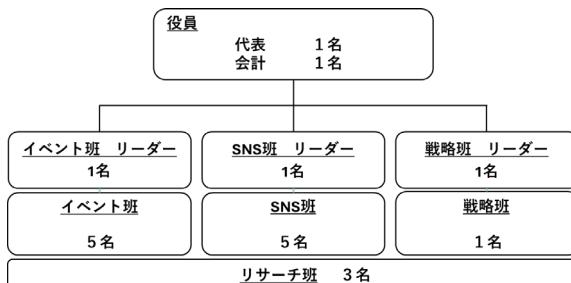
[課題点・取り組み実現への打開]

新規講習先の開拓・交渉が非常に難しい。多くの高校すでに今年度のカリキュラムが組まれている以上、特に公立高校ではカリキュラムの変更の融通がききにくいこともあり実施が困難な例が多くあった。次年度に向けて、カリキュラム決定前に我々の講習を組み込んでいただけるか検討依頼を行う必要があると感じた。

| | |
|---|-----------------------------------|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| 膳所・平野地域の思春期世代の子供たちがトラウマインフォームドな大人たちと関われる、落ち着ける第三の場所づくり「あかり」 | |
| 〔SDGs 目標番号：3, 10, 16, 17 〕 | |
| 提案者 | ：メンタルヘルス研究会 HAMMOCK 内部団体「あかり」亀田隼大 |
| 自治体担当者 | ：大津市福祉部子ども未来局子ども・子育て安心課 竹 光彦 |
| 連携大学担当者 | ：滋賀医科大学学務課学生支援係 北川慎悟 |
| 発表者 | ：亀田隼大 |

1. 取組体制

右図に示す組織体制で運営している。イベント運営を中心に行うイベント班、Instagram や HP 作成を中心に行う SNS 班、長期的な活動方針を検討する戦略班、子どものこころに関する情報の調査を中心に行うリサーチ班の 4 グループに分かれて、活動を実施している。



代表：伊藤楨（医学科 3 年） ※発表者の亀田隼大（医学科 6 年）は前代表

会計：荒木泰人（医学科 3 年）

サポーター：滋賀医科大学精神医学講座 増田史先生

2. 背景・目的

現代の若者を取り囲む環境は厳しい。小中学校における不登校児童生徒数は 11 年連続増加し、過去最高を更新し続けている。逆境的小児期体験 (ACEs) 研究では、小児期に虐待や家族の機能不全などの逆境体験を経験すると、問題行動の出現や肥満、糖尿病、うつ病、がんなどの罹患率が上昇することが明らかとなっているが、18 歳までに 1 つ以上の逆境的体験がある人の割合は 32% となっており、看過できない問題となっている。逆境的体験のケアとして、保護的体験の積み重ねが重要視されている。そのため、若者の居場所づくりが推進されているが、大津市平野学区や膳所学区では学校数に対し、若者の居場所が少ないと私たちは考えている。

そこで本会は、主に大津市平野学区および膳所学区の思春期世代の児童生徒・若者を対象に、各地域でリラックスできる場所の提供と、こころに関するヘルスケアの情報発信を通じて、若者たちが学校および自宅以外で「心の平穏をつくる」支援をすることを目的としている。思春期世代をターゲットにしたのは、思春期の苦悩と孤独に対し、年齢的に本学学生が近い目線で考えることができるためである。ただし、多くの若者に、少しでも心が落ち着く場所をつくりたいという考え方で活動を行っており、精神科領域の医療介入を目的とした団体ではない。

3. 活動内容

【地域の若者に向けた活動】

- ① 若者の第三の居場所づくり 「あかり cafe」
- ② 「心の平穏を保つ」ための情報発信 (Instagram)

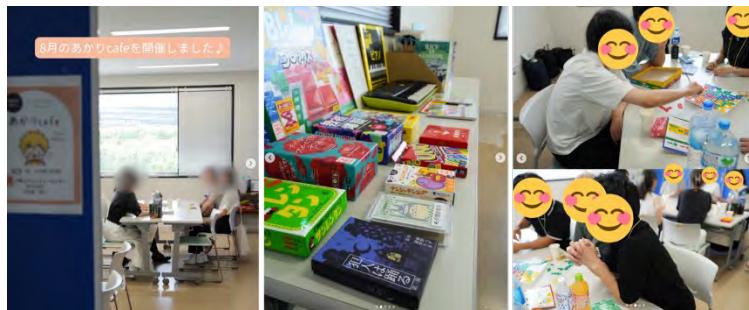
【所属学生に向けた活動】

- ③ 所属学生のための勉強会実施
- ④ 地域の福祉関係者との交流

4. 成果と課題、今後の取組

- ① 若者の第三の居場所づくり 「あかり cafe」

膳所公民館・平野コミュニティセンターをお借りして、第三の居場所「あかり cafe」を、2025年3月ごろから6回開催した。小中高生の参加者数は、合計4名、関係者の見学数は合計7名で、認知度の低さや毎回来たくなる空間づくりやスタッフの対応に課題があると考える。来年度は、空き家をお借りして、固定した場所であかり cafe の開催を計画している。



- ② 「心の平穏を保つ」ための情報発信 (Instagram)

Instagramの団体アカウントを用いて、「心の平穏を保つ」ためのセルフケアの方法を発信している。具体的には、滋賀医科大学精神医学講座、増田史先生の著書より、セルフケアの項の内容を、オリジナルキャラクターを活用しながら、わかりやすく紹介・実践している。フォロワー数は207で順調に数を伸ばしている。



- ③ 所属学生のための勉強会実施

団体所属学生のセルフケアに関する知識習得のため、定期的に勉強会を実施している。過去にトラウマインフォームドケア、過剰適応、不登校診療、若者との対話、接し方等について精神科医、総合診療医、教育者などに講演会を実施いただいた。今後も勉強会を実施予定である。

- ④ 地域の医療・福祉関係者との交流

活動を行う中で、地域の医療・福祉関係者とのつながりができ、メンバーごとに異なる施設、イベントへの訪問・見学を実施した。

以上

No. 18

| | |
|--------------------------------|--|
| プロジェクト名（活動テーマ）： | |
| じぶんごと Café(コミュニティの場を創る) | |
| [SDGs 目標番号： 3, 4, 5, 11] | |
| 提案者 : 国際保健・地域医療研究会 TukTuk 大坪琉奈 | |
| 自治体担当者 : 大津市地域医療政策課 主査 高田沙織 | |
| 連携大学担当者 : 滋賀医科大学学務課学生支援係 北川慎悟 | |
| 発表者 : 国際保健・地域医療研究会 TukTuk 江南匡駿 | |

1. 取組体制

本活動は、国際保健・地域医療研究会 TukTuk が主体となり、地域交流の場となる「じぶんごと cafe」を企画・運営しました。

実施にあたっては、学生団体びわふえすと連携し、「病院を『医療のハブ』から『地域のハブ』へ！」をテーマとした地域交流イベントを共催する形としました。会場となる徳田医院（くわくわ診療所）様には、場所の提供および運営面での多大なご協力をいただき、学生スタッフ 30 名（4 大学・2 高校）が連携して運営にあたりました。

2. 背景・目的

近年、地域社会において、世代や立場を超えて人々が気軽に集い、交流できる「コミュニティの場」が減少しています。さらに、学生においても同じことが言えます。社会課題に向き合う学生団体は多々あるものの、その活動を情報発信したり、団体間や地域社会と交流したりする場は少ないとという課題があります。

このような背景から、「じぶんごと Café」では、社会課題に向き合う学生団体を誘致し、各自のテーマにそって、じぶんごととして考えるワークショップを開く場を提供しています。

本活動は、このコンセプトのもと、「コミュニティの場を創る」ことを活動の軸に据えています。最大の目的は、「人と人を繋げる」ことです。ここでいう「人」とは、地域住民の方々に限らず、医学生や医療者も含め、普段は交わることのないカテゴリーを超えた多様な人々を指します。私たちは、このような新しい繋がりが生まれることが地域の活性化に貢献し、ひいては参加者一人ひとりの心身の「健康に繋がったら良い」との強い思いを持って、本企画を実施しました。
イベント目標：300 名の来場。

3. 活動内容

上記の目的を達成するため、以下の概要で地域交流イベントを開催しました。

- 日時・場所：2025 年 10 月 5 日（日）10:00～16:00、徳田医院（くわくわ診療所）
- 主な内容：会場内に、来場者が肩の力を抜いて過ごせる「カフェ」のような対話空間を創出し、運営を行いました。ここでは学生スタッフが常駐して来場者を温かく迎え入れ、一人ひとりと丁寧に向かい、何気ない会話を楽しむ空間づくりを徹底しました。

また、この空間を活用して地域課題や活動に関する情報を掲示・発信することで、学生と住民、あるいは住民同士の対話が自然と生まれるような仕掛けを行い、社会問題を「自分ごと」として考えるきっかけを提供しました。

今回の「じぶんごと Café」では以下の団体を誘致し啓発活動を行っていただきました。

- 虎姫高校 「がんすごろくを用いたガンに対する啓発活動」
- 若者に HPV ワクチンについて広く発信する会 Vcan
「知らないまま後悔しないで。医療系学生が伝えたい子宮頸がん予防」

- 参加者:

- 当日は 250 名の地域住民の方にご来場いただきました。(目標 300 名に対し達成率 83.3%)
- 運営は学生スタッフ 30 名 (4 大学・2 高校から参加) が担当しました。

4. 成果と課題、今後の取組

本イベントの実施により、以下のような成果が得られました。

第一に、「コミュニティの場」の創出です。カフェというリラックスした空間を用意したこと、イベントに訪れた地域住民や学生が足を止め、自然な形で会話が生まれる場面が見られました。

第二に、多世代・多職種の交流を促進できました。医学生や医療者、地域住民、高校生スタッフが、カフェのテーブルを囲んでフラットに交流し、「人と人を繋げる」という目的を達成できました。

第三に、「学びの場」の提供です。運営に携わった学生スタッフが、地域の方々と直接対話することで、お互いに社会課題を肌で感じ、まさに「自分ごと」として捉える貴重な機会となりました。

